

## 2022年度 白梅学園大学大学院博士課程 学位審査報告書

学籍番号： B7H002

氏名： 中田 範子

学位の種類： 博士（子ども学）

学位論文題目： 保育環境における幼児の滞留と「場」の形成

論文審査委員： （主査） 本山 方子  
（副査） 佐久間路子（指導教員）  
（副査） 宮田まり子  
（副査） 無 藤 隆

### 1. 論文内容の要旨

#### 第I部 本論文の枠組み

保育者が保育環境を構成する時には幼児の動線を考慮し、滞留しやすい空間をどう構成するのかを考え、幼児が滞留する空間的な条件を整えることが幼児の安心感(増田・齋藤, 2017)や遊びの取り組み方(河邊, 2006)等に変化をもたらし、保育者の援助・視線・意識に影響を与える(松延・中村・藤田・本田・石田・松延・香曾我部, 2016 他)ことが示されている。

本論文は、幼稚園教育要領第1章総則の「見方・考え方」「環境を通じた教育」を説明する「幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき(略)」の箇所を幼児の滞留に着目して分析・考察するものであり、身近な環境に主体的に関わる姿を育てるために「幼児はどのように空間に滞留し、場を形成しているのか」を問うものである。

本論文の問題提起と位置づけについて、次の四点を挙げる。第一に、保育環境は、大人のねらいや意図、価値観をもとに構成された場である。幼児から見れば、保育者の存在も一つの保育環境であることから、保育者の存在を幼児はどのように捉えているのかという視点を持つ。第二に、幼児が知覚した保育環境と保育者が知覚した保育環境には相違がある。第三に、幼児が保育環境のある空間に滞留するのは、そこから場の意味や機能、自分にとっての価値を見出しているからと考える。第四に、幼児にとっての場の意味は発達に伴い移り変わるため、幼児の場と関係性を縦断的に捉えることが求められる。

以上を踏まえ、保育環境における幼児の滞留する姿に着目し、幼児と場の関係性を多角的に捉えることで、幼児の場との関わりを複数の視点から分析し、その様相から幼児にとっての滞留とは何かを明らかにすることを目的とする。また、「幼児は保育環境のどのような空間に滞留するのか。」「幼児の滞留や場の形成にはどのような要素や関係性が関連しているのか。」という二つの問いを立てながら分析・考察を行う。これらの問いを持って、縦断的

アプローチ、幼児の声を聴くアプローチ、横断的アプローチで、保育環境における幼児の滞留と場の形成を捉える。そして、得られた結果をそれぞれ交差させながら論証し、幼児が滞留し、場を形成する様相とその関連要素に着目して、幼児にとって滞留とは何かを結論として導く。

本論文は、三部構成となっている。第1部では、第1章で問題の所在を明らかにして目的を示している。第2章で幼児の滞留と場の形成に関する理論や先行研究を整理して本論文全体の考察の視点を示す。第II部は、6つの研究で構成されている。第4章は、【研究1】として特定の幼児を対象とした縦断的アプローチ、第5章は、【研究2-1, 2, 3】として幼児の声を聴くアプローチ、第6章と第7章は、【研究3-1, 2】として保育環境内の閉所をフィールドとした横断的アプローチをとっている(図)。

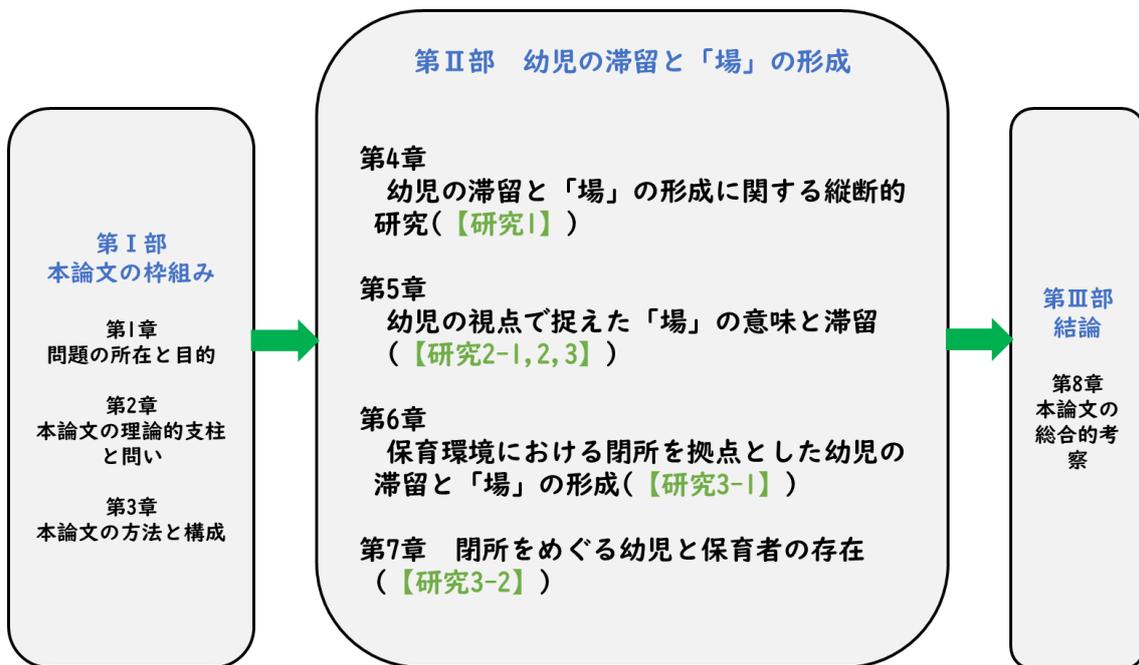


図. 本論文の構成図

## 第II部 幼児の滞留と「場」の形成

### 1. 幼児の滞留と「場」の形成に関する縦断的研究(【研究1】)

本研究の目的は、特定の対象児の保育室内における滞留する姿や、場を形成する姿を回遊行動も含めた場をめぐる行動特性から、縦断的な視点で考察することである。

調査方法は、観察場所を保育所とし、在籍する特定の女兒S子を対象として動画を撮影しながら行う自然観察法である。観察期間は2011年7月～2014年3月で、対象児の2～5歳児クラス在籍期間である。8:30から開始される室内での自由遊びの時間を週1回程度、1回約60分、全59回観察した。その後、得られたデータをもとに逐語記録を作成した。

分析方法としては、コーディングとストーリーラインの作成、エピソード分析を行った。作成した逐語記録のうち、対象児の「場に滞留する場面」、「滞留行動から回遊行動に移行する場面」、「回遊行動から滞留する場面」を中心に、サンプリングした全196事例を分析の対象とした。次に、対象の全事例を前後の文脈から、滞留行動と回遊行動のきっかけや目的、様相に着目して、一つひとつの事例の文脈から主題を見出しコーディングし、カテゴリー表

とストーリーラインを作成した。また、対象児がどのような空間に滞留するのか、滞留や場の形成にはどのような要素や関係性が関連するのかに着目しながら全事例を質的に分析した。以上の方法で作成したストーリーラインとエピソード分析をもとに、幼児の「保育者のそばにいる姿」を「保育者のそばに滞留して場を形成する姿」と解釈し、回遊する姿も含めて空間を巡る行動を分析し、次のように考察した。

第一に、滞留し場を形成する空間の推移についてである。2歳児7～9月に保育者のそばに滞留することが多かった対象児は、やがて保育室内の体をすぼめて入り込む閉所や別所に滞留するようになり、また、遊びたい遊具のある空間で滞留するようになった。次に、保育者が遊びの用途を意味づけた場や見立てやすい特徴のある空間に滞留するようになり、5歳児になると遊びの拠点なしに他児と関係を構築し保持するようになった。一方で、遊びたい遊具のある空間は、偶然性を伴った他児との出会いの場となり、その後、遊具をもって回遊しながら関係性が構築されて、「場」が形成されるようになった。

第二に、滞留と場の形成の関連要素についてである。場に求める機能を維持しながら滞留する空間が移行する姿から、幼児は、空間に応じた機能を活用するだけでなく、空間に機能を求め、滞留する空間を見出していると考察する。また、幼児にとって、回遊と滞留が相反する意味や機能を持つのではなく、他児と一緒に回遊しながら場を形成し、関係を構築する機能を有するようになることを考察する。

## 2. 幼児の視点で捉えた「場」の意味と滞留【研究2-1, 2, 3】

本研究の目的は、幼児に園内の「好きな場所」（【研究2-1】）、「よく遊ぶ場所」（【研究2-2】）「秘密の場所」（【研究2-3】）と理由等を問い、幼児が自発的に発した言語データと撮影された画像から、幼児の場への意味づけや価値づけの関連要素を導き、考察することである。

幼稚園、保育園、認定こども園の各1園計3園で、幼児に一人ずつ、園内の「好きな場所」「よく遊ぶ場所」「秘密の場所」を案内し、理由やそこでの遊びを回答し、該当する写真を撮影してもらった。調査日時は、2020年2月～2021年3月の全13回、午前中の約1時間であり、研究協力者は3～5歳児計81名である。次に、得られた画像と言語データから、園内の「好きな場所」と「秘密の場所」の物理的特性とその理由を分類しながら分析した。その結果から次の三点を考察した。

第一に、好きな場所とよく遊ぶ場所の関連性についてである。研究協力者の園内の「好きな場所」「よく遊ぶ場所」の回答をその特性に着目して分類した結果、「室内の遊び別コーナー」、「室内の一角」、「室内の個人用スペース」、「屋外の遊具」、「好きなもののある場所」、「全体」、「園内の遊び場以外の施設設備」、「特徴的な自然物のある場所」、「閉所」となった。次に、「よく遊ぶ場所」の回答を「好きな場所」の回答と照合して一致率を算出したところ、3歳児18.8%、4歳児12.5%、5歳児16.0%であった。

第二に、幼児が好きな場所と意味づける要素である。「その他」を含めて11の概念が抽出され、『好ましさ』『度合いの高さ』『目的の遊びが可能』の категорияに分類できた。該当する回答が最も多い「存在を認知」に分類した回答からは、そこにある物や人、動物の存在が場への意味づけに結びついている。次に多い「過去の情動体験」に該当する回答からは、この場所で感じた楽しさや自己効力感と、今後も同じ体験ができるだろうという期待感が場への意味づけと結びついている。

第三に、幼児が「秘密の場所」と意味づける場の特性と関連要素である。「秘密の場所」と意味づける場の特性は、「閉所」「用途別コーナー・部屋」「仕切り」「移動空間」「個人使用の空間」「その場にある物」の6つが見いだされた。

また、「秘密の場所」と意味づける要素については23の概念が導き出され、「別空間とのつながり」に該当する回答の年齢別の全切片数に対する割合を比較すると、年齢が高くなるほど割合が高く、「隠れる」に該当する回答は、3歳児に比べて4,5歳児で割合が高かった。

### 3. 保育の環境における閉所を拠点とした幼児の滞留と「場」の形成（【研究3-1】）

本研究の目的は、保育環境の閉所に焦点を当てて観察し、幼児にとっての閉所の機能について分析することである。

調査方法としては、A保育園園庭に設置された閉所であるプレイハウスに滞留するA保育園の1～5歳児及び保育者を対象とした自然観察法である。午前中の自由遊びの時間にビデオカメラで動画を撮影し、得られた録画データをもとに逐語記録を作成した。観察期間は2008年3月～2009年11月の29日間であり、観察時間は約2,760分である。次に、園庭の閉所を拠点とした幼児の遊び場面約840分をすべて逐語化して、全73事例にまとめ、得られた事例を幼児が閉所に近づき入所する場面を中心に「何を目的に閉所に入ったのか」、入所してからの幼児の場面を中心に「閉所内で何をしているのか」というテーマのもとにオープンコーディングし、カテゴリー表を作成してストーリーラインを抽出した。その結果、4のカテゴリーと10のサブカテゴリーに集約され、26の概念から10のストーリーラインが生成されて、次のように考察した。

幼児は、閉所に身を置き滞留して他児と楽しさを共有し、関係性や視点の転換の面白さや目新しさを見出していた。また、幼児にとっての閉所の機能は、閉所の中という空間があり、そして閉所の外という空間があって生成され、閉所の中と外を行き来することや中にいながら外と繋がる機能がある。また、偶然性も経験することから、保育環境における閉所は、共有と転換、中と外の空間の活用とつながり、そして偶然性を含めて機能が生成され、このような機能が幼児を引き寄せ、遊びたくなる空間として存在すると考察する。

### 4. 閉所をめぐる幼児と保育者の存在（【研究3-2】）

本研究の目的は、閉所に滞留する幼児と保育者の関わりに着目し、保育者の幼児への関わり、幼児は保育者の存在の捉え、保育者が閉所に直接関与しない場面での場の形成について考察することである。

【研究3-1】と同様の調査方法で得たデータを「保育者の位置」、「子どもと保育者の関わり」というテーマのもとに、オープンコーディングしてカテゴリー表を作成し、ストーリーラインを抽出した。また、幼児が保育者に関与を求める事例、保育者が関与しない事例をまとめて考察した。

その結果、閉所内に滞留する幼児と保育者との関わりに着目したところ、1～4歳児への保育者の関わりは言葉のやりとりが最も多く、1歳児へは幼児を取り巻く状態を受容する関わり、2歳児へは対等な関わり、3,4歳児へは幼児を取り巻く状況を判断・確認を意図する関わりが多く見られ、5歳児が滞留する場面には、保育者が直接関与していなかった。

また、1～4歳のどの年齢においても、閉所に滞留する幼児から、保育者に関与を求める姿が見られた。保育環境における閉所は他とは隔離された空間であるが、時に、幼児は閉所

の外部にいる保育者の姿を探して存在を認識しており、保育者の関与を求め、自分の滞留する空間やそこでの状況を保育者に伝えてアピールしながら、外にいる保育者との関わりを保つことが示された。

それには、【研究 3-1】で明らかになった、偶然性を孕む共有と転換という閉所にある場の機能や特性から創出される魅力、他の空間では得られない外部の人との距離感や見え方、閉所に滞留するという特別感を感じることで、そして、離れた場にいる外部の保育者に伝えたいくなるような保育者との関係性が構築されていることが関連すると考察する。

また、閉所に滞留し、遊びの拠点としている幼児にとっては、保育者は常に拠点に存在しているわけではなく、幼児が保育者の存在を確認する姿が見出せた。保育者が直接関わる場面の有無や保育者がその場に滞留して共に場を形成しているか否かだけでなく、幼児の言動から幼児に内在する保育者をも捉えることの重要性を示すものとして、今後も着目する必要があると考える。保育者が直接関与することはなくとも、保育者の存在を感じ、確認できる、幼児と保育者の関係性が、保育者の関与なく自律的な遊びを展開する姿や、幼児の離れた場にいる保育者に伝えたいくなる気持ちに繋がると考察する。

### 第Ⅲ部 結論

幼児にとって滞留とは、偶然性を孕みながらも、ある空間に身の置きどころを見出し、その物理的特性を知覚しながら活用して場を形成し、場から自分にとっての価値を見出して、その空間が幼児にとって「生きられる空間」となるプロセスの第一歩であり、また、この第一歩こそが保育環境と幼児の関係性の中で見いだされた、幼児教育の見方・考え方に示す「幼児が身近な環境に主体的に関わる」姿ではないかと考える。

この結論について三点説明を加える。第一に、身の置きどころを見出すことの安心感についてである。【研究 2-1】では、好きな場所として、「安心できる」といった回答はなかったが、【研究 2-3】では、「秘密の場所」と意味づける要素として、「気持ちの安定を求める」という要素が見出された。また、回答から、幼児は保育環境のある空間に身を置くことで気持ちが安定することを経験し、安心感を求めてある空間に入り込む行動を体得していることが考察できるが、その行為は「秘密」といった要素を孕んでいることが示された。

第二に、そこで行うことの目的に対する認識についてである。【研究 2-1】から、「好きな場所」を意味づける要素の一つとして、目的の遊びが可能であることが示された。また、保育者が用途を意味づけた遊びのコーナーは、【研究 1】と【研究 2-1, 2】から、幼児が滞留しやすく遊びに取り組みやすい場所であることが明らかになった。幼児は、滞留してそこで可能な遊びを知覚しながら取り組む経験を積み重ねることで、そこで行うことの目的を認識しながら自分の身の置きどころを見出すことを体得すると考える。

第三に、他者との関係性に対する認識についてである。【研究 3-1, 2】からは、幼児は、他とは異なる特性を有する閉所に滞留して他者と関わっていた。このように、幼児は空間の特性に応じた他者との関わり方を経験し、身につけていくと考察する。

本論文は研究の対象やフィールドが限定的であったため、異なる対象や方法で研究した場合にどのような結果が得られるのかを確かめることが今後は必要である。また、幼児が狭い空間に滞留する姿は、環境を通した教育を幼児の身体性という観点から解釈する手掛かりになる可能性がある。この点は、本研究では十分に深められなかった限界であり、今後の課題である。

## 2. 論文審査の結果の要旨

保育環境は保育者のねらいや意図、価値観をもとに構成された空間であるが、幼児は必ずしも保育者の予想通りには空間を知覚していないことを問題化し、幼児はいかに自ら空間を機能づけ、意味づけているか、その様相を明らかにすることを課題とした意欲的な論文である。本論文では、この課題への切り口として、幼児による空間における「滞留」という事象に着目した。幼児の滞留は空間に対する何かしらの意味づけや機能化、価値づけを伴っており、意味や機能、価値をまとめて空間が「場」として形成されること、その「場」は偶然性を帯びつつ幼児独自の世界を構成することが議論された。この議論において、閉所での滞留と回遊行動の関連性、幼児自身による秘密の場所や好きな場所の開示などのアイデアを採用した点に独創性があり、フィールド調査に基づき緻密に分析を進めている点を評価することができる。

本論文では、幼児が身の置きどころを定めることが、「環境を通した教育」の根幹をなすことが示唆された。幼児は保育環境において、どこにどのように身を置くか選ばねばならず、滞留は身の置き方の一つの在りようである。その在りように保育の在りようが表れ、問われる。保育論の創出という点においても、本論文の意義を見いだすことができる。

審査の経緯は以下の通りである。第1回審査会は、2022年11月8日に19時15分より開かれた。「環境を通した教育」において、保育者の掌中の保育環境に幼児を追い込むことを問題化し、幼児もまた自ら空間を機能づけ、意味づける主体であり、いかに機能化や意味づけが図られるか明らかにするという課題設定について、十分に有効であることが確認された。また、この課題に向けて、閉所における滞留や回遊行動、秘密の場所、好きな場所といったアイデアの採用に研究上の独創性が認められた。長期のフィールド調査に基づき詳細なデータを有し、綿密に分析を進めようとしている点についても十分に評価された。一方で、以下の点について、論述として不十分さが見られた。第一に、全体を貫く理論が脆弱であり、理論のどの箇所が調査の各章で論証されているのか、理論的な整合性を明確にする必要があった。第二に、論文における用語について、十分な検討と記述が不足しており、定義と使い分けなどについて精査が必要であった。第三に、用いられている研究手法は手堅く、行動科学として優れているものの、分析方法等において再検討が必要とされた。第四に、博論として適切な書式を一貫して用いることが求められた。以上、論文の独創性は評価されるものの、改善すべき点が散見されるため、以上の諸点について修正を受けて、第2回審査会を開催することとなった。

第2回審査会は、2023年1月16日に18時20分より開かれた。第1回審査会において指摘された事項の多くが適切に修正された。特に、理論構築が格段に進み、章の再編が図られ、理論と各論との整合性が高まった。とりわけ、幼児にとって当初、「意味」のない空間に「意味」がつけられて「場」となる過程のダイナミクスが描かれ、幼児なりの身の置きどころの在りように保育の在りようが問われることが明確になったことは高く評価された。また、章の再編と一部の再分析によって、幼児の滞留に関する発達が描かれた。一方で、用語と概念の整理が行われたものの、一部にまだ不明瞭さが残されていた。最終章の総合的考察の記述が厚くなったものの、結論の提示について不十分さが見られた。論旨同士をつなぐ記述が不足し、論理的な整合が不明となる箇所が散見された。これらの点について修正を要することとして、第3回審査会に進むことが了承された。

第3回審査会は、2023年2月8日に18時30分より公開にて開かれた。第2回審査会で指摘された事項は全て修正されていた。理論の記述に、事例など具体的事象についての記述がよく絡み合い、論理的整合性が高まっただけでなく、十分な論証がなされた論文となった。質疑応答では「閉所」をめぐって議論があった。大人からは見えていても、幼児の視線の遮りや心理的な遮断がある場合に閉所というのか、幼児にとって物理的に周囲から「見られな

い」という感覚が閉所の条件となるのか、本論文の結論の拡張可能性も含めて、議論が深まった。第3回審査会では、修正が全て適切になされ、全ての質問に的確に答えたことが認められ、博士論文として合格とされた。